

まいど！ざいむ局です！

関西元気企業



～夢の種を蒔け！～

全国で増え続ける耕作放棄地。この放棄地を、無農薬の野菜作りを手軽に楽しめる“体験農園”にリメイクするビジネスを立ち上げたのが、「マイファーム」です。都会の家族連れに人気で、全国70カ所、利用客は2500組に増えています。野菜作りを楽しんでもらいながら、耕作放棄地も再生するという新しいビジネスで市場を切り開く、ベンチャー代表者、西辻氏にお話をお伺いしました。

企業情報

名称 株式会社 マイファーム
所在地 京都市下京区五条通室町西入ル
東鋸屋町189番地 クマガイ五条ビル3F
設立 平成19年9月 代表者 西辻 一真
従業員 64名 資本金 47百万円
H P <http://www.myfarm.co.jp/>

● このようなビジネスをはじめたきっかけは？

私は、福井県の田舎町で生まれました。近所には、減反政策により放棄された農地がいっぱいあり、幼い頃から荒れ果てていく農地を見ながら育ってきたんです。その時は、漠然と「もったいないなあ」とぐらいにしか思っていませんでしたけどね。

高校生になった時ぐらいでしょうか。「なぜ、農家の人はこんなに苦しんでいるのだろうか」と疑問を持ち始めました。

そういう農家の姿を見ているうちに、「地元農家のために何とかしたい」という思いが強くなり、いつか特殊な野菜を開発したり、地元で根ざしたものを品種改良して作りたいと考えるようになっていました。

大学は、京大の農学部に進み、化学肥料や農薬の研究、バイオや遺伝子組み換えといった研究に没頭しました。

しかし、勉強すればするほど、「何か違うな」というものを感じるようになっていったんです。



西辻一真 さん

——何か違うなどは？——

「日本の農業が根本的に変わらなければ、何も変わらないのではないか」とか、「農業にとって大切なことは、何だろう」というようなことを真剣に考えるようになっていきました。

その結果、「(国や就農者だけでなく)消費者に農業を理解してもらい、農業(耕作)の大切さを知ってもらうことが重要である」ということに気づいたんです。

だから、そういったことを多くの人に分かってもらえる場を提供するため、耕作放棄地を使って今の事業を始めたのです。

● 耕作放棄地を利用するメリットは？

農家にとっては、固定資産税程度を稼げればよいと考えている人も多いことから、安く借り上げることができるといった点でしょうか。

また、その土地の所有者(農家)を耕作指導員として雇うことができます。体験農園の利用客からは、プロ(農家)から指導してもらえると好評です。



● 創業時に金融機関からどのようなサポートがありましたか。

創業時に自己資金だけではならず、金策に奔走しました。どの金融機関でも「事業内容は面白い」と一定の理解はしてもらえますが、肝心の融資となると、「前例のない事業だから」と断られました。

その時、某銀行の支店長さんだけが、私の話を熱心に聞いた後、「事業計画は曖昧だが、君は裏切らない人間だと思う。君に貸そう。」と、融資をしてくれたんです。その銀行とは、長いお付き合いをさせていただこうと思っています。



● 苦勞されたようなお話があればお聞かせください。

借り上げていた農地を急に返して欲しいとの申し出を受けた時ですね。貸主が亡くなり、相続人同士でもめたことが原因なんです。

貸主は、契約上1年前に解除の申し入れを行う必要があるのですが、聞き入れてもらえません。結果として、契約を解除せざるを得なかったのですが、辛かったのは、作物が成長している途中段階での解除ですから、その土地の利用者に対する説明です。その時は、何とか理解はしてもらいましたが、非常に辛かった思い出として残っています。

● 東北への支援をされていると聞きましたが。

仙台市で農園のオープンの準備を進めていた最中に、東日本大震災が発生しました。オープンの準備に携わってくれた方々も亡くなり、地元農家の人々も農園のオープンどころか農業自体を止めてしまうというような状況の中で、自分に何か出来ることはないか、という思いが強くなりました。



その時に考えたのが、海水による塩害被害を受けた農地をどうにか再生できないか、ということでした。大学の先生や各方面にも相談し、自力で土壌の再生(塩分濃度を耕作可能水準まで下げる)ができるブレンド土壌剤の開発に成功し、さらに、高コストとなるため、資金面では他の企業の協力も得て、約2ヶ月という短期間で約70haの農地再生を行うことが出来ました。今後も続けていきたいと考えています。



● 今後の展開・夢は？

通過点ではありますが、農林水産大臣をして仕組み全体を変えたいですね。



<取材後記>

昔、NHKテレビで「明るい農村」という農家向け情報番組があった。番組に出演する農家の人々の笑顔は、どれも輝いていたように記憶している。昭和30年代から続いたこの番組も、時代の変化とともに、いつしか打ち切られ、西辻さんもこの番組を見たことがないと言う。物心のついた彼の目に飛び込んできたのは、地元の荒れ果てた耕作放棄地や苦悩する農家の姿であり、まさに「暗い農村」というべきものだったのだろう。

「僕の夢は、農水大臣になることです」、「だから、まだまだ夢の途中なんです」と力強い口調で語ってくれた西辻さん。彼は、今、「夢」という品種の種を蒔いているところなのかも知れない。それは、やがて、大きな実となり、いつしか収穫の時期を迎える。

東日本大震災や原子力発電所事故、環太平洋経済連携協定(TPP)交渉参加など、日本の農業を取り巻く環境は確かに厳しい。

しかし、彼の真剣な眼差しの奥には、日本の「明るい農村」がはっきりと見えているのかも知れない。

掲載している情報は、平成23年12月時点のものです。